



平成 18 年度  
沖縄県立埋蔵文化財センター企画展

# 土からあらわれた金属製品

- 輻った金属製品の輝き -

沖縄県立埋蔵文化財センター

## もくじ ◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

ごあいさつ	1
食す	2
建てる	4
飾る	6
戦う	8
祀る	12
まとめ	14
展示資料一覧	16
用語解説	18
時代区分表	19
参考文献一覧	20

## 凡例

1. この図録は「平成18年度沖縄県立埋蔵文化財センター企画展 土からあらわれた金属製品」(開催期間: 平成18年10月24日～11月26日) の解説付図録である。
  2. 展示会の企画・編集は山本正昭担当した。また各項目の執筆者は文末に記した。
  3. 当センター所蔵資料の写真撮影は矢舟章浩、光鶴香が行い、写真、図のレイアウトは金城友香が行った。
  4. 調査報告書に記載されている資料名と記載されている資料名が一部異なる資料が存在する。これは報告書刊行後、新たな研究成果によって詳細が判明したことによるものである。
  5. 展示資料並びに当図録掲載の金属製品について一部、京都国立博物館工芸室の久保智康氏からご教示頂いた。また鎌倉芳太郎写真資料については、沖縄県立芸術大学附属資料館より借用し、同館の栗国恭子氏よりご教示頂いた。記して謝意を表したい。

## ごあいさつ

沖縄県内において開催された考古関連展示会の内、これまで金属製品をテーマに据えた企画展は数えるほどしかありませんでした。県内出土の金属製品を扱った考古学的資料としては、教育普及のために沖縄県立博物館がまとめた『考古資料より見た沖縄の鉄器文化』をあげることができますが、それも鉄製品に限定されています。

そこで今回当埋蔵文化財センター企画展「土からあらわれた金属製品」では、これまで沖縄県教育委員会または当センターの発掘調査により出土した金属製品を中心に展示を行うことにしました。今回の企画展の目的は①金属製品を通して、時代とともに生まれ失われていく道具、すなわち「もの」の変遷を理解する。②県内出土の金属製品が広く県民の目に触れる機会を提供し、これらの金属文化を通して、沖縄の歴史を再認識してもらう。③今日、日常生活において何気なく触れている金属製品の重要性を改めて認識することで、「もの」の大切さを学ぶ機会とする。などの3点を掲げています。また、一口に金属製品と言っても形態は様々ですが、今回は製品の用途により「食す」「建てる」「飾る」「戦う」「祀る」の5項目に分け展示を行いました。

さらに、国指定の重要文化財である『沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器 附一金属製品 附一ガラス玉』のうち金属製品を特別に公開展示し、その保存処理の工程についても写真・パネルにより解説をしています。

金属製品の出土は年々増加傾向にあり、それに伴い徐々に研究も進められています。金属製品はわれわれが日々の生活において身近に目にする「もの」の一つであり、現代社会において欠くことのできない「もの」です。今回の展示は、先人達がどのように金属製品に触れ、利用してきたのか、そしてその歴史的意義について考える絶好の場であると思います。この機会にぜひ沖縄出土の金属製品について理解を深めていただければ幸いです。

平成18（2006）年10月24日

沖縄県立埋蔵文化財センター  
所長 田場 清志

# 食す

## ～金属製品の普及から見る食生活の変革～

沖縄で「食」に関わる金属製品が出現するのは、貝塚時代後期（弥生時代～平安時代並行期）のことです。この時代を代表する遺跡として知られる、宇堅貝塚群から出土した板状鉄斧と刀子<sup>†</sup>が、現在沖縄で出土している最古の金属製品です。板状鉄斧は、本土では弥生時代中期前半に出現する鉄器で、磨製石斧を鉄に置き換えたものと言われています。沖縄では、貝塚時代中期に多く作られた石斧が、後期になると激減する傾向がみられますが、これは鉄斧が石斧に取って代わったためとも考えられます。

刀子とは小刀のことです。本土では、武器として用いられたと思われる例もありますが、沖縄では一般的に日常品として利用されていたようです。鉄製刀子は、全国的には弥生時代以後に出土例があり、主に加工具として使用されていたと考えられています。貝塚時代後期の出土例は、宇堅貝塚群の他に、熱田貝塚などがあります。

グスク時代に入ると、刀子（図2）・斧（図6）の他に、鎌（図5）・鎌（図7）などの食糧採捕道具や、鎌（図4）のような調理具などの鉄製品も流通するようになりました。このことから、グスク時代には鉄の精錬加工技術が発達したことが窺えます。これに起因する鉄製品の増加は、当時の食生活に大きな影響を及ぼしました。沖縄では12世紀以降に本格的な農耕が始まります<sup>※2</sup>が、農具に鉄が用いられたことにより、生産が向上して穀物の栽培が普及したと考えられます。また、様々な鉄製農具に関する説話や伝説が沖縄の島々に伝えられていることからも、鉄製農具の伝来が当時の社会に及ぼした影響の大きさがわかります。

農業の定着には、この頃に飼育されるようになった牛の役割も大きかったと思われます。その一方で、牛は食用としても利用されていたと考えられており、遺跡から出土する牛骨に遺された切痕（図1）から、切断には斧や鎌<sup>※3</sup>のような鉄器が使用されたと思われています。

こうした一般家庭への鉄製品の浸透は、土器利用においても変革のきっかけを与えたようです。この時代に使用され始めた鉄鍋は、それまで用いられていた土製のもの（図3）と比べて、熱の伝導率が良いため次第に普及し、土器が焼成されなくなる要因になったと考えられています。このような鉄製品の需要は、後代になんでも引き続き、近世には「ミンダカリカンジャー（新村渠）」を代表とする鍛冶などが、那覇を中心活動したと言われています。

（伊藤 主）



図1 ウシの左上腕骨 新里元島上方台地遺跡  
解体時の切痕がみられる。

### 【注釈】

※1 宇堅貝塚群で出土した板状鉄斧は、山ノ口式土器（弥生時代中期後半）と共に伴して出土している。

※2 ただし、鉄製農具の実態については未だ不明瞭。



図3 鍋形土器（復元資料）上村遺跡出土



図2 刀子 首里城跡鎮之間地区

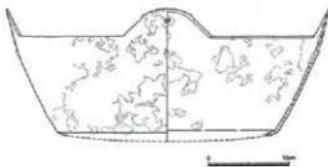


図4 鉄錫片 首里城跡東のアザナ地区  
左図は図上復元図。



図6 左図 - 磨製石斧 慶来慶田城遺跡  
右図 - 鐵斧 稲福遺跡出土

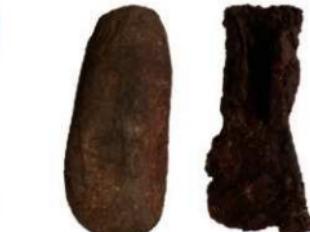


図7 鎌 首里城跡東のアザナ地区  
穀物を刈り取る際に利用されたと考えられる。



図8 山刀 慶来慶田城遺跡  
民族・民俗例から、調理・農業・林業などに用いられたと考へられる鉈。  
右写真はその持ち方（上江洲均『沖縄の民具』慶友社 1973より）。



図5 詰 上村遺跡出土  
全体が厚いサビに覆われている。

# 建てる ~裏方として使われた金属製品とそれをめぐる人々~

建築に使われる金属製品は、「切る」、「削る」、「留める」の用途に大きく分けることができます。「切る」には手斧、「削る」には鎔や鑿を使用し、「留める」には釘や鉛、鎌などを使います。特に釘や鉛、鎌といった金属製品は建築に関わる代表的な遺物です。

さて、グスク時代では貝塚時代に比べ、土木建築に関する金属製品が多く使用され始めました。14世紀後半頃になると鉄斧や鎌、楔や槍鎔、角釘、鎌が勝連城跡や今帰仁城跡、首里城跡など大規模なグスクから出土しています。

グスクの城壁や橋、井戸、墓、道など、当時の土木建築の多くは石灰岩が利用されていましたが、この石灰岩を切ったり削ったりするには金属工具、特に鉄製品は不可欠な工具でした。木造建築でも、それらを組み合わせる為には精密な加工を必要とし、鉄器の存在は欠かせないものであったと思われます。

この金属工具の出現の背景には大型の礎石・基壇建物が出現したことによる土木・建築技術の向上があります。この礎石・基壇建物はそれまでの掘立柱建物とは異なって専門的な知識が必要となります。よってそれを実現させるための職人を抱え込むことが絶対条件となってきます。と同時に建築材に必要な木材を加工するための道具や釘などの金属製品を大量に供給していかなければならなくなっています。このような背景から多くの金属製品をつくりだす高度な鍛冶技術の会得があったものと考えられます。城塞のグスク（例えば首里城跡など）で、金属製品や鍛冶跡などが発見されていることから、城主である按司のお抱え鍛冶職人が居た可能性が極めて高いと思われます。

15世紀後半以降になると、さらに金属製品の種類は多様化していきます。グスク以外でも

1494年に完成した円覚寺からは釘や鎌、鉛で留めるための穴が開いた飾り金具の他、同様に固定するために側面に穴を開けた鬼瓦や丸瓦などが出土し、天界寺でも留め具や角釘が出土しています。また1677年に国王の別邸として建てられた御茶屋御殿跡からも釘や鎌といった多くの金属製品が出土しています。国王の王城となった16世紀以降の首里城跡では南殿から蝶番、北殿からは銅製の鉛、座金、御内原からばねなどが多く見つかっており、建物の機能的な部分から装飾的な部分に至るまで金属を使用するようになります。

このように「建てる」に関わる金属製品は、初めは裏方として使われ、近世になると美意識を反映する製品が多くなりました。「建てる」に関係する製品は、表舞台に関わっていくようになった製品と言えます。



参考資料 円覚寺仏殿天井組物  
(鎌倉芳太郎写真資料 沖縄県立芸術大学附属資料館所蔵)

(仲村 紙)



図1 手斧 慶来慶田城



図2 角釘 円覚寺跡



図3 錐 首里城跡上の毛及び周辺地区



図4 銅鋲 首里城跡南殿地区



図5 蝶番 首里城跡鎮之間地区



図7 嵌金具 首里城跡御内原地区



図6 鬼瓦 円覚寺跡



図8 嵌金具使用例 鞍馬寺楼門

○ 内が嵌金具

# 飾る

## ～周辺地域から取り入れた彫金技術と琉球の美意識～

金属製品が沖縄で普及してくると高度な彫金の技術も導入されてくるようになりました。はつきりした時期は解りませんが、鎧に付属する八双金具（図1）には細かい文様が刻まれていて、主に首里城跡や勝連グスクといった大規模なグスクから多く見られることから15世紀には確実に彫金技術が導入されていたものと思われます。16世紀以降になるとグスク以外にも円覚寺跡、天界寺跡といった寺院において建物の扉や内部の廟を飾る飾り金具や櫃や筆筒といった調度品に付属する飾り金具（図2）が使用されるようになります。彫金技術は更なる需要の広がりを見ることができます。また、帶金具（図3）、聞得大君の簪や各地の神女に王府から下賜した簪といった着飾るための金属製品にも多くの彫金が施されています。

飾り金具は主に線彫り技法によって文様が施されています。線彫り技法は2種類あり、先の尖った筆で細線を連続的に彫っていく毛彫りと先が直線状の筆を打ち込み、模型の凹みを連続させて線状に見せる蹴彫りがあります。沖縄の場合はこの毛彫りと蹴彫りとの区別が難しい線彫り技法を採用しているのを見て取ることができます。また文様間の空白部を埋めるための円環状の筆を密に打ち付ける魚々子も多く見られます。主に魚々子をまばらに充填打ちするものが良く見られ、個々の魚々子も大粒であるのも沖縄の特徴であると言えます。

これらの飾り金具は琉球王府直営の工房で製作していたとされ、技術者も王府の管理の下でこれらの飾り金具の製作に関わっていたとされています。中国や日本とも異なる沖縄独特の文様がそのまま金属製品に刻まれ、調度品や建物を彩っていましたものと思われます。稀に円覚寺跡出土の、廟扉に付いていた飾り金具（図4）は江戸時代に畿内（現在の大坂府・奈良県全城、京都府南部、兵庫県南東部）あたりで製作されており、他の飾り金具と比べて意匠や魚々子の詰め方に違いを見ることができます。

一方で王府以外での飾る金属製品として代表的なものとしては沖縄本島から先島地域にかけて分布する近世の古墓から出土する銅製の簪を挙げることができます。頭の部分は花形や匙形、耳搔き形に大まかに分けることができ、長さは10cm未満のものから20cmを超えるものまで見ることができます（図5、6）。また嫁入りの翌日、里帰りの時に付けるとされる銀製の指輪も各地の遺跡から出土しています（図7）。これらは現在も古典舞踊において装身具として使われています。また、その姿を映したであろう日本製の銅鏡も遺跡から出土しており、その裏面には吉祥文が描かれているのが確認できます（図8）。

このように金属製品に施された彫金はその時代における沖縄の美意識、そしてそれを具象化させた先人の技が反映されていると言えるでしょう。

（山本 正昭）



図1 八双金具 首里城跡南殿地区



図2 飾り金具 上：円覚寺跡 下：真珠道路



図3 帯金具 首里城跡東のアザナ地区  
下はX線透過写真



図4 廟扉飾り金具 円覚寺跡



図5 簪 ヤッチノガマ・カンジン原古墓群

図6 簪 嘉田地区古墓群



図7 指輪

右：首里城跡御内原地区  
左：首里城跡淑順門地区



図8 銅鏡 首里城跡南殿地区



図9 銅鏡 ヤッチノガマ・カンジン原古墓群

戦テ

## ～争いの中で培われていった金属製品～

県内から出土する金属製品のうち、戦う目的の製品として武器や武具などがあります。武器では刀や矢の先に装着する鐮などがあり、一方、武具には鎧や胄といった身を守る道具がありますが、ひと言に刀、鎧、胄といっても、それらを形作るために数多くの金属製品を様々な部分で使用します。つまり、刀や甲冑など戦いに利用される道具は、細かい金属製品を組み合わせることで、その道具の本領を發揮することが出来るのです。

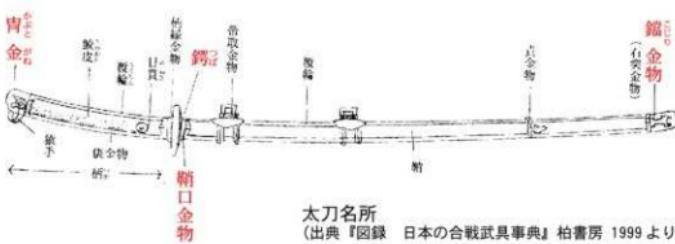
古い記録に、7世紀頃に中国の隋と琉球が争った記事がありますが、戦う目的の金属製品の記述は出てきません。県内の発掘調査事例を見ると、現在のところ、最古とされているのがうるま市宇堅貝塚出土の三角鎌で、弥生時代後期頃とされています。他にも同形とされる銅製鎌が読谷村の中川原貝塚から出土しています。時期は下って平安時代並行期の集落遺跡とされるうるま市の平敷屋トウバル遺跡から太刀の鍔が出土しています。因みにこの鍔の類例資料が京都市鞍馬寺に現在も所蔵されており、太刀の全体像を窺い知ることができます。これら鎌や太刀の鍔はかなり数が限られており、実際に戦いの道具として普及していたとは考え難く、またつくりも手が込んでいるため、宝器として使用されていた可能性が極めて高いものと思われます。

グスク時代には、各地の按司が争っていたことが知られていますが、実際に首里城跡や天界寺などグスク時代の遺跡の発掘調査を行うと、13世紀後半～14世紀前半に鉄鎌といった戦う道具が増加しており、14世紀後半にもなると大量に使用されていたことが知られています。

また、グスク時代には武器以外に武具としての金属製品も登場しています。たとえば、鎧や冑などの武具には八双金具・小札などといった各部品が用いられていますが、特に首里城跡で大量に出土しています。このようにグスク時代の遺跡などを発掘調査することで、当時の人々がどのような武具を身に着けていたか明らかになってきました。これらのことから、県内出土の武具が中世日本の甲冑と類似していることも窺い知ることが出来たのです。

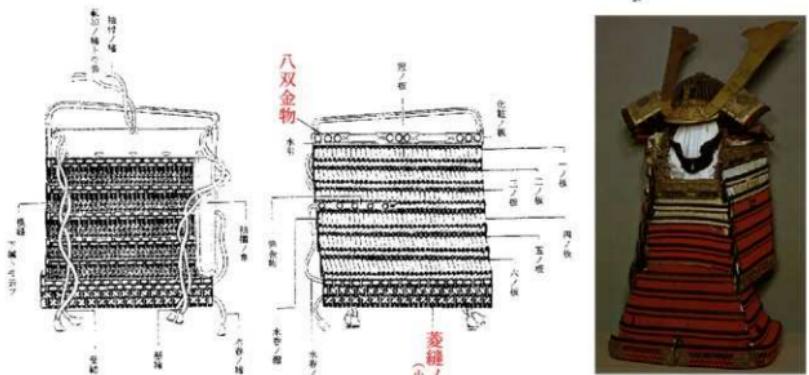
しかし、沖縄から出土する戦闘用の金属製品は首里城跡からの遺物が圧倒的に多く、先島などからはほとんど確認できていません。また、それらの主な生産地が琉球なのか、日本なのかということに関しては明確なことは分かっていません。このように、戦う目的をもった金属製品については、まだ判明していないことも多く、今後の出土資料に期待が集まります。

(長濱 健起)



## 鎧・胄の 部位名称

『新訂増補故實叢書 武裝圖說』明治図書出版 1954 に加筆



赤絲威肩白鎧（出雲大社蔵）  
（出典『図録 日本の甲冑・武具事典』  
柏書房 1999 より）

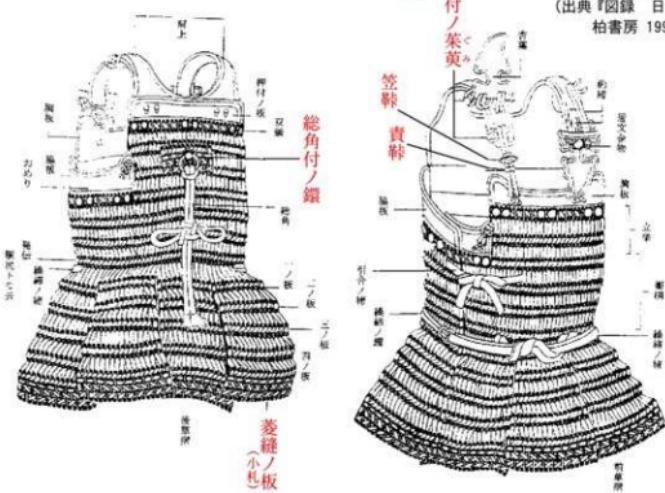




図1 鎌形 首里城跡北殿地区



図2 鎌形台 首里城跡南殿地区



図3 鋸 銚子 ナカンダカリヤマ古墓群



図4 鉄 左：首里城跡東のアザナ跡  
右：首里城跡管理用道路地区



図5 参考 黒漆剣鎧形透鐔  
(鞍馬寺蔵 出典『武士の意匠-透かし鐔-  
古墳時代から江戸時代まで』佐野美  
術館 1999 より)



図6 銅 平敷屋トウバル遺跡



図7 鎌形 首里城跡北殿地区



図8 八双金具 首里城跡下之御庭地区



図9 八双金具 首里城跡廣福門地区



図10 本小札 首里城跡廣福門地区



図11 小札(二山基石頭伊予札)  
首里城跡用物座地区



図12 賣軒 首里城跡右掖門地区



図13 鎖帷子 首里城跡鎖之間地区



図14 環座 首里城跡下之御庭地区



図15 菱形笠鉢 首里城跡木曳門地区



図16 笠鉢 首里城跡詰所地区



図17 切子頭 首里城跡木曳門地区

# 祀る　～人々の思いが反映された金属の形～

今から400万年前に人類（オーストラロピテクス）が誕生して以来、厳しい自然環境の中から学び得た経験や知識を蓄積し、宗教的な心理を体系化するまでにはかなりの時間を要しています。人類が「祀る」という行為の芽生えは意外にも新しく、約3万年前～1万年前の後期旧石器時代からです。例えばシベリアのマリタ遺跡からはマンモスの牙製のビーナス像（地母神）崇拝やフランスのラスコー洞窟壁画は食料となる牛や馬などの狩りが成功するように動物の身代わりを描き、これに呪術的な効果を与えて祈願したものと考えられています。日本では約2万4千年前の遺跡である鹿児島県財部町の耳取遺跡から河原石に線を刻んで女性像（ビーナス）を描いたものが発見されています。お守りとして祀ったのでしょうか。さて、沖縄のグスク時代（平安末～室町）から近世琉球において「祀る」行為を考えた場合、その対象は自然（万物）崇拝、神仏祈願、地鎮、鎮魂などがあります。

遺跡から一括で出土した祭祀遺物の例は、1956年2月7日～1957年3月20日に実施された園比屋武御嶽石門復元工事の際に、礎石下部より金貨鳩目銭（金製厭勝銭？）6枚、銅貨鳩目銭数十枚が発見されているようです。<sup>その</sup>最近では、1998年に南城市知念の斎場御嶽内にある三庫理の発掘調査があり、金製勾玉・石製勾玉（9個）、中国製の青磁碗・皿・盤（10個）、金製厭勝銭（9枚）、古銭（534枚）が発見されています。出土品の中で特に、金製の厭勝銭は祭祀に使用された特殊な銭です。恐らく、神様への返礼品、或いは土地の神様を祀るために、金製厭勝銭や古銭などを地下に埋めたのでしょう。特殊な例としてはインドネシアから伝わった「クリス（蛇行剣）」のように権威の象徴や儀礼的・超自然的な呪力を持った宝剣（クリス崇拝）が第二尚氏の菩提寺であった円覚寺跡（1492年創建）から出土しています。県内遺跡から出土した祭祀と関係する主な金属製品には、仏具（磬子、伏鉢、梵鐘、香炉、小型の鐘など）、地鎮（鏡、古銭など）、鎮魂（古銭、鳩目銭など）などがあります。

（金城 亀信）



参考資料1 拝所で拝む女性  
(鎌倉芳太郎写真資料 沖縄県立芸術大学附属資料館所蔵)



参考資料2 八重山の祭列  
(鎌倉芳太郎写真資料 沖縄県立芸術大学附属資料館所蔵)



図1 クリス 円覚寺跡



図2 簪子 円覚寺跡



図3 伏鉢 円覚寺跡

図4 鳥形香炉の把手破片 首里城跡京の内地区



図5 香炉の破片 真珠道跡



図6 小型の鐘 真珠道跡

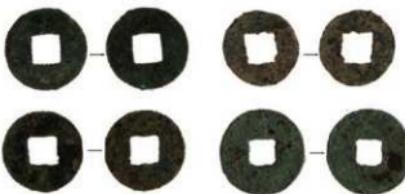


図7 八稜鏡 首里城跡城郭南側下地区

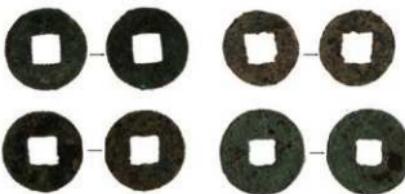


図8 輪銭 ヤッチのガマ・カンジン原古墓群



図9 無文銭 ナカンドカリヤマ古墓群

# まとめ

沖縄における金属製品の製作はグスク時代から始まり、そして15世紀にその数は増加していきます。金属の普及はそれまでの日常生活を一変させたことはこれまで触れてきた「建てる」「食す」「戦う」の項目で解って頂けたかと思います。

ここで注意しなければならないのは金属製品が入ってくる弥生時代後期頃から金属製品が普及する15世紀頃まで1500年以上の開きがあることです。現在のところ、弥生時代後期頃の金属製品とされるものは中川原貝塚や宇堅貝塚から出土した鐵2点のみとても少ないとから、実際に鐵として使われていたと考えられません。また10世紀前後に太刀の鍔が平敷屋トウバル遺跡から出土していますが、非常に凝ったつくりであることから、これも実戦向きであったとは言えません。よってこれらは祭祀や集落の財を示す宝器として位置付けられていたと思われます。つまりグスク時代に入る前までの長い期間、極めて限られたモノとして取り扱わされていたことを窺い知ることができます。

グスク時代になると日本本土や中国から大量の人とモノが入ってくるようになります。15世紀前半には金属製品が公式の交易品として取り扱われていたことが中国側の史料である『明実錄』から窺い知ることができます。具体的には大量の銀や銅錢を琉球が皇帝から賜られた記事や金銀の器を皇帝に献上した記事を見るることができます。また、当時の中国側における禁輸品であった武器（おそらく刀剣類や火器兵器）が琉球へ密輸されていることも記されており、東中国海をまたにかけて「死の商人」が跋扈していたことも知ることができます。

沖縄本島において金属を加工する技術を入手するようになると、それらを掌握していく権力が出現します。それは中山、北山、南山といった三山勢力で、互いに争った結果、1429年に中山が統一し、更なる金属製品の掌握も図られてくるようになります。それを示すように首里城跡や浦添ようどれ、今帰仁グスクで銅湯玉、坩堝、鑄型、銅製品のスクラップが出土しています。王権に関わるこれらの遺跡において高度な金工作業が行われていたことは鍛冶職人の管轄とそれらを組織できるほどの権力であったことを逆に読み取ることができます。

第1尚氏の時期における金属製品の周辺をとりまく環境は良く解っていませんが、第2尚氏以降（1477）では鉄鍛冶職人の管理を行なう鍛冶奉行所と金具師、表具師、削物師、鍛打細工、鈴細工、彫物細工、縫物細工、糸組細工、玉貫細工といった現業部門である金奉行が設置されています。これらは王府が必要とする道具を製作する機関で、「飾る」や「祀る」で紹介したように一般には





出回ることのない製品がつくりされました。この機関の中で琉球独特の彫金技術や図様が洗練されていきました。この体制は1879年の琉球処分まで多少の変改があったものの、続いていくことになります。

以上のように金属製品から読み取ることのできる歴史情報は豊富であり、沖縄における国家のあり方を通史的に見ていく上でも有効であることは言うまでもありません。またこのことは新たな琉球史像を示すことのできる資料として、これからも注目していくものと思われます。

一方で王府以外の一般庶民においてはグスク時代から近世を通じて日常の炊事に使われる金属製品の生産は行わらず、島外からの輸入に頼ってきました。また近世の初めまで許可なく鉄製品を使うと罰せられることもあったため、民衆の間で使用されることは殆どありませんでした。鉄器が普及するのは17世紀以降ですが、王府政策の下での砂糖生産が普及するのに伴って以降になります。それは砂糖生産の過程で鉄鍋が必要になることから薩摩の琉球館を通じて大量にもたらされるようになります。18世紀後半になると沖縄へ入ってくる船頭から鉄鍋を買い取ることもなされるようになりますが、あくまで王府管轄下での鉄器使用という制限が付いていました。結果として民衆が鉄器を自由に製作、そして入手できるようになったのは砂糖作付制限が撤廃された1888年からのことになります。

このように見ていくと、現在は何気なく日常生活の中で使われている金属製品ですが、沖縄においては民衆に普及して未だ1世紀半も経っておらず、意外に新しく普及した製品であると位置付けられます。

最後に、遺跡から出土する様々なモノの中で、とくに金属は使い道によって様々にその形態が変化します。時に人々の生活を向上させるモノに変化したり、時に戦争の道具といった凶器として利用されるモノに変化します。まさに金属は使い方次第によってどのようにでも取り扱うことができます。言うまでもありませんが、あくまで使うのは「人」であるということを忘れてはいけません。今回の企画展を通してみた時、我々の身近にある金属製品を再確認できればと思います。

(山本 正昭)

# 展示資料一覧

	遺物名	遺跡名	報告書番号	図版番号		遺物名	遺跡名	報告書番号	図版番号
食す	鉄鍋	ヤッチのガマ	28	第103図2	飾る	簪	首里城跡管理用道路地区	24	第82図3
	鉄鍋	尻並遺跡	32	第61図53		簪	首里城跡管理用道路地区	24	第82図6
	鉄鍋	尻並遺跡	32	第61図60		簪	首里城跡管理用道路地区	24	第82図8
	鉄鍋	尻並遺跡	32	第61図61		簪	首里城跡下之御庭地区	26	第92図2
	鉄鍋片	首里城跡東のアザナ地区	36	第59図13		簪	首里城跡用物座地区	26	第92図7
	話	福福遺跡	14	第20図27		簪	首里城跡用物座地区	26	第92図10
	話	佐敷グスク	53	第11図2		簪	首里城跡の下地区	34	第43図2
	話	佐敷グスク	53	第11図10		簪	嘉田地区古墓群	37	第56図1
	話	上村遺跡	17	第59図3		簪	嘉田地区古墓群	37	第56図2
	鏡	湯田古窯跡	18	第103図16		簪	嘉田地区古墓群	37	第56図3
	鏡	尻並遺跡	32	第61図64		簪	嘉田地区古墓群	37	第56図4
	鏡	天界寺跡	25	第88図11		簪	嘉田地区古墓群	37	第56図5
	鏡	首里城跡東のアザナ地区	36	第59図12		簪	嘉田地区古墓群	37	第56図6
	刀	船浦スラ所跡	16	第16図2		飾り金具	福福遺跡	14	第23図46
	刀子	首里城跡之間地区	41	第112図150		飾り金具	円覚寺跡	30	第67図1
	歎	首里城跡管理用道路地区	24	第81図18		飾り金具	円覚寺跡	30	第67図2
	包丁	船浦スラ所跡	16	第16図3		飾り金具	円覚寺跡	30	第67図3
	山刀	慶来慶田城遺跡	20	第44図2		飾り金具	円覚寺跡	30	第67図5
	鉄斧	福福遺跡	14	第20図26		飾り金具	円覚寺跡	30	第67図6
建てる	角釘	天界寺跡	25	第88図12		飾り金具	首里城跡東のアザナ地区	36	第60図18
	角釘	首里城跡奉神門地区	21	第59図10		飾り金具	真珠道路	42	第40図1
	角釘	首里城跡奉神門地区	21	第59図11		飾り金具	真珠道路	42	第40図2
	角釘	首里城跡奉神門地区	21	第59図12		飾り金具	首里城跡御内原地区	44	第66図18
	角釘	ヤッチのガマ	28	第101図9		飾り金具	首里城跡御内原地区	44	第66図19
	角釘	ヤッチのガマ	28	第101図12		飾り金具	首里城跡淑順門地区	43	第80図285
	角釘	ヤッチのガマ	28	第101図13		指輪	湯田古窯跡	18	第103図13
	角釘	首里城跡管理用道路地区	24	第81図6		指輪	首里城跡北殿地区	21	第70図13
	角釘	首里城跡管理用道路地区	24	第81図7		指輪	首里城跡御内原地区	44	第66図21
	角釘	首里城跡管理用道路地区	24	第81図12		指輪	首里城跡淑順門地区	43	第80図288
	角釘	首里城跡管理用道路地区	24	第81図13		指輪	首里城跡京の内地区	—	—
	角釘	円覺寺跡	30	第67図17		指輪状銀製品	首里城跡北殿地区	21	第70図14
	角釘	円覺寺跡	30	第67図18		銅鏡	福福遺跡	14	第23図39
	角釘	円覺寺跡	30	第67図19		銅鏡	首里城跡南殿地区	21	第67図1
	角釘	首里城跡東のアザナ地区	36	第59図2		銅鏡	ヤッチのガマ	28	第103図9
	角釘	首里城跡東のアザナ地区	36	第59図6		座金	カンドウ原遺跡	15	第37図左側
	角釘	首里城跡東の下地区	34	第44図6		座金	カンドウ原遺跡	15	第37図右側
	角釘	首里城跡鎮之間地区	40	第110図96		座金	首里城跡京の内地区	41	第20図68
	鍵	円覺寺跡	30	第68図31		座金	首里城跡京の内地区	—	—
	鍵	御茶屋御殿跡	33	第29図5		帶金具	首里城跡東のアザナ地区	36	第60図14
	鍵	ナカンダカリヤマ古墓群	39	第34図159		帶金具	首里城跡南殿地区	21	第65図18
	鍵	首里城跡上の毛地区	40	第48図3		環状金具	首里城跡廣福門地区	26	第88図22
	鍵	首里城跡京の内地区	—	—		把手	首里城跡城郭南側下地区	35	第45図5
	鍵	首里城跡京の下地区	34	第44図10		環と環座	真珠道路	42	第40図6
	鍵	ナカンダカリヤマ古墓群	39	第19図86		毛抜き状製品	尻並遺跡	32	第53図8
	銅鏡	首里城跡南殿地区	21	第65図21		新軸	御茶屋御殿跡	33	第29図1
	銅鏡	首里城跡南殿地区	21	第65図23		轆轤	首里城跡の下地区	34	第44図13
	銅鏡	首里城跡南殿地区	21	第65図22		鈴	天界寺跡	25	第88図9
	銅鏡	首里城跡南殿地区	21	第65図24		鑿	首里城跡上の毛地区	40	第48図2
	銅鏡	首里城跡北殿地区	21	第69図18	戦う	八双金具	首里城跡北殿地区	21	第69図3
	六葉形釘隠し	首里城跡内原地区	44	第66図26		八双金具	首里城跡北殿地区	21	第69図4
	鉄斧	船浦スラ所跡	16	第16図1		八双金具	首里城跡北殿地区	21	第69図5
	手斧	慶来慶田城遺跡	20	第44図1		八双金具	首里城跡北殿地区	21	第69図7
	留め具	天界寺跡	29	第62図11		八双金具	首里城跡下之御庭地区	26	第87図1
	楔形製品	尻並遺跡	32	第53図7		八双金具	首里城跡木曳門地区	26	第87図3
	舞番	首里城跡鎮之間地区	41	第88図221		八双金具	首里城跡木曳門地区	26	第87図6
	唄金具	首里城跡御内原地区	44	第65図17		八双金具	首里城跡廣福門地区	26	第87図7
	簪	福福遺跡	14	第23図43		八双金具	天界寺跡	29	第62図6
	簪	ヤッチのガマ	28	第102図1		八双金具	首里城跡の下地区	34	第44図12
	簪	ヤッチのガマ	28	第102図2		八双金具	首里城跡詰所地区	41	第20図65
	簪	ヤッチのガマ	28	第102図4		八双金具	首里城跡詰所地区	41	第21図90
	簪	ヤッチのガマ	28	第102図8		八双金具	首里城跡之間地区	41	第78図28
	簪	ヤッチのガマ	28	第102図9		八双金具	首里城跡之間地区	41	第86図220
飾る									

	遺物名	遺跡名	報告書番号※	図版番号		遺物名	遺跡名	報告書番号※	図版番号
戦 う	八双金具	首里城跡御内原地区	44	第65図11		鎖帷子	首里城跡京の内地区	—	—
	八双金具	首里城跡京の内地区	—	—		鎖帷子	首里城跡京の内地区	—	—
	八双金具	首里城跡京の内地区	—	—		鎖帷子	首里城跡京の内地区	—	—
	鎧部材 (八双金具)	首里城跡南殿地区	21	第65図4		覆輪	首里城跡鎮之間地区	41	第110図91
	鎧部材 (八双金具)	首里城跡南殿地区	21	第65図5		覆輪	首里城跡廣福門地区	26	第88図24
	鎧部材 (八双金具)	首里城跡南殿地区	21	第65図6		菱形笠紙	首里城跡木曳門地区	26	第87図2
	小札	首里城跡用物座地区	26	第88図18		鉢	首里城跡鎮之間地区	41	第109図62
	小札 (二山碁石頭 伊予札)	首里城跡用物座地区	26	第88図19		星兜の鋼板	首里城跡京の内地区	—	—
	小札	首里城跡鎮之間地区	41	第108図20		星兜の鋼板	首里城跡京の内地区	—	—
	小札	首里城跡鎮之間地区	41	第108図21		縦角付の環座	首里城跡京の内地区	—	—
	小札	首里城跡鎮之間地区	41	第110図92		縦角付の環座	首里城跡下之御庭地区	26	第88図20
	小札	真珠道跡	42	第41図32		切子頭	首里城跡木曳門地区	26	第88図21
	本小札	首里城跡下之御庭地区	26	第88図15		羅	首里城跡北殿地区	21	第70図12
	本小札	首里城跡廣福門地区	26	第88図16		舞	ナカンダカリヤマ古墓群	39	第7図8
	本小札	首里城跡用物座地区	26	第88図17		鉛立物	首里城跡京の内地区	—	—
	鐵	首里城跡管理用道路地区	24	第81図1		圓垣(柵垣)	首里城跡京の内地区	—	—
	鐵	首里城跡管理用道路地区	24	第81図2					
	鐵	首里城跡管理用道路地区	24	第81図3					
	鐵	伊佐前原第一通路	27	第49図1					
	鐵	首里城跡東のアザナ地区	36	第59図1					
	鐵	後美久原遺跡	38	第62図4					
	鐵	後美久原遺跡	38	第62図5					
	鐵	首里城跡鎮之間地区	41	第86図219					
	鐵	真珠道跡	42	第41図37					
	笠鞍	首里城跡奉神門地区	21	第59図16					
	笠鞍	首里城跡南殿地区	21	第65図1					
	笠鞍	首里城跡木曳門地区	26	第87図8					
	笠鞍	首里城跡詰所地区	41	第20図69					
	笠鞍	首里城跡鎮之間地区	41	第112図148					
	笠鞍	真珠道跡	42	第41図28					
	鍼形	首里城跡北殿地区	21	第69図8					
	鍼形	首里城跡北殿地区	21	第69図11					
	鍼形	首里城跡北殿地区	21	第71図6					
	鍼形	首里城跡北殿地区	21	第71図9					
	鍼形	首里城跡用物座地区	26	第87図12					
	鍼形台	首里城跡用物座地区	26	第87図11					
	鍼形台	首里城跡廣福門地区	26	第87図9					
	鍼形台	首里城跡廣福門地区	26	第87図13					
	鍼形台	首里城跡鎮之間地区	41	第112図147					
	鍼形台	首里城跡南殿地区	21	第65図15					
	鍼形台	首里城跡京の内地区	—	—					
	飼	平敷屋トゥバ遺跡	19	第77図1					
	飼	ヤッチのガマ	28	第103図10					
	飼	天界寺跡	29	第62図7					
	飼	首里城跡鎮之間地区	41	第78図29					
	飼	首里城跡京の内地区	—	—					
	飼	首里城跡京の内地区	—	—					
	飼	首里城跡京の内地区	—	—					
	切羽	湧田古窯跡	18	第103図12					
	切羽	喜友名貝塚・喜友名ガスク	22	第68図6					
	切羽	首里城跡木曳門地区	26	第87図14					
	切羽	首里城跡詰所地区	41	第20図70					
	切羽	首里城跡京の内地区	—	—					
	切羽	首里城跡京の内地区	—	—					
	貴軒	首里城跡北殿地区	21	第69図2					
	貴軒	首里城跡用物座地区	26	第87図5					
	貴軒	首里城跡木曳門地区	31	第43図12					
	鎖帷子	首里城跡鎮之間地区	41	第108図23					
	鎖帷子	首里城跡鎮之間地区	41	第108図24					

※報告書番号は卷末の参考文献一覧の各文献名頭の番号です。

	遺物名	遺跡名	報告書番号※	図版番号		遺物名	遺跡名	報告書番号※	図版番号
記 る	鎖帷子	首里城跡京の内地区	—	—		輪鉄	首里城跡京の内地区	—	—
	鎖帷子	首里城跡京の内地区	—	—		輪鉄	首里城跡京の内地区	—	—
	鎖帷子	首里城跡京の内地区	—	—		輪鉄	首里城跡鎮之間地区	41	第110図91
	覆輪	首里城跡廣福門地区	26	第88図24		菱形笠紙	首里城跡木曳門地区	26	第87図2
	菱形笠紙	首里城跡鎮之間地区	41	第109図62		鉢	首里城跡鎮之間地区	—	—
	星兜の鋼板	首里城跡京の内地区	—	—		星兜の鋼板	首里城跡京の内地区	—	—
	星兜の鋼板	首里城跡京の内地区	—	—		縦角付の環座	首里城跡京の内地区	—	—
	縦角付の環座	首里城跡下之御庭地区	26	第88図20		縦角付の環座	首里城跡下之御庭地区	26	第88図20
	切子頭	首里城跡木曳門地区	26	第88図21		切子頭	首里城跡木曳門地区	26	第88図21
	羅	首里城跡北殿地区	21	第70図12		羅	首里城跡北殿地区	21	第70図12
	舞	ナカンダカリヤマ古墓群	39	第7図8		舞	ナカンダカリヤマ古墓群	39	第7図8
	鉛立物	首里城跡京の内地区	—	—		鉛立物	首里城跡京の内地区	—	—
	圓垣(柵垣)	首里城跡京の内地区	—	—		圓垣(柵垣)	首里城跡京の内地区	—	—
	輪鉄	ヤッチのガマ	28	第101図18					
	輪鉄	ヤッチのガマ	28	第101図19					
	輪鉄	ヤッチのガマ	28	第101図20					
	輪鉄	ヤッチのガマ	28	第101図21					
	輪鉄	ヤッチのガマ	28	第101図22					
	輪鉄	ヤッチのガマ	28	第101図23					
	輪鉄	ヤッチのガマ	28	第101図24					
	輪鉄	ヤッチのガマ	28	第101図25					
	輪鉄	ナカンダカリヤマ古墓群	39	第18図79					
	無文銭	ナカンダカリヤマ古墓群	39	第18図76					
	無文銭	ナカンダカリヤマ古墓群	39	第18図77					
	無文銭	ナカンダカリヤマ古墓群	39	第25図126					
	無文銭	ナカンダカリヤマ古墓群	39	第33図147					
	無文銭	ナカンダカリヤマ古墓群	39	第33図148					
	無文銭	ナカンダカリヤマ古墓群	39	第33図149					
	無文銭	ナカンダカリヤマ古墓群	39	第33図151					
	無文銭	ナカンダカリヤマ古墓群	39	第33図150					
	伏延	首里城跡北殿地区	21	第72図3					
	伏延	円覺寺跡	30	第68図19					
	香炉	天界寺跡	42	第62図12					
	香炉	真珠道跡	29	第40図14					
	小型の鐘	真珠道跡	42	第40図15					
	クリス	円覺寺跡	30	第68図25					
	簪子	円覺寺跡	30	第68図36					
	八岐鏡	首里城跡城郭南側下地区	35	第45図1					
	扇形香炉の崩 部破片	首里城跡京の内地区	—	—					
	扇形香炉の把 手破片	首里城跡京の内地区	—	—					
	鏡(ヒ)	首里城跡京の内地区	—	—					
	長柄の跳子	首里城跡京の内地区	—	—					
	青銅製容器	首里城跡京の内地区	—	—					
製 造 関 連	坦堀	湧田古窯跡	18	第106図1					
	坦堀	湧田古窯跡	18	第106図2					
	坦堀	湧田古窯跡	23	第73図2					
	坦堀	天界寺跡	25	第88図16					
	坦堀	首里城跡木曳門地区	26	第85図1					
	坦堀	首里城跡木曳門地区	26	第85図2					
	坦堀	首里城跡木曳門地区	26	第85図4					
	坦堀	首里城跡木曳門地区	26	第85図9					
	坦堀	天界寺跡	25	第88図17					
	羽口	湧田古窯跡	18	第107図					
	羽口	尻並遺跡	32	第58図1					
	羽口	尻並遺跡	32	第58図3					
	羽口	尻並遺跡	32	第58図5					
	鉄津	尻並遺跡	32	第60図					

## 用語解説

### 鎧型（いがた）

青銅器や鉄器などの金属製品をはじめ、ガラス製品などを製作する際に用いられた。材質により石型・粘土型ともよばれる。片面だけの鎧型と2つ以上の鎧型を組み合わせる用いる合せ型に大別される。

### 鎌（かすがい）

材木と材木をつなぎとめるために打ち込む、両端の曲がった大釘。

### 鉋（かんな）

材木を削ってしあげるのに使う工具。

### 切子頭（きりこかしら）

切籠頭とも書く。賽の四角の隅を三角に切落とした形のものを切子といふ。笠印附の鐘座・絶縁附の銀座に用いられ、鎌を通すのが古い形式である。

### 楔（くさび）

金属や堅い木材でできた、V字型や三角形の形をした道具。一端は厚く、もう一端の方に向かうにつれて薄くなる。

### 鎖帷子（くさりかたびら）

護身用に鎌をそろえた布の帷子。鎌や衣類の着籠として用いられた。

### 茱萸金具（ぐみかなく）

中央が太く、両端がやや細く作られた管状の金物。形状が茱萸の実に似ているところから名付けられた。

### 鑿子（けいす、きんす）・鑿子（きんす）

法会や儀式などで使う仏具の一つ。鉢形の鎌。読経の前後に打ち鳴らして使う楽器。

### 小札（こざね）

挂甲・胄・肩甲・草摺・臑當・鎗手（手甲）それに馬甲などをつくるためにつかわれる上端が半円状の長方形を基本とした定型化の強い鉄板。

### 鉢（こはぜ）

緒を繋ぎとめるための金具。

### 切羽（せっぱ）

鎌を固定するため、その前後の籠と柄の間にとりつけた金具。

### 鑿（たがね）

金工用の鋼鉄製の「のみ」で金属の彫刻・截断に用いる。

### 太刀（たち）

平安時代以降の脣刀様式のものをさす。太刀は刃方を下にして左腰に佩くもの。

### 引用

- ・笛間良彦「図録日本の甲冑武具事典」1981
- ・甲冑用語集WEB版 <http://www.katchu.com/html/2901.html>
- ・図解 考古学辞典 水野清一 小林行雄 編 東京創元社刊 昭和34年
- ・日本考古学小辞典 江坂輝徳 芹沢長介 坂詠秀一 編 1983
- ・沖縄大百科事典 中 沖縄タイムス社 1983
- ・日本史広辞典 日本史広辞典編集委員会 編 山川図書出版 1997

### 蝶番（ちょうつがい）

開き戸や箱のふたなどを自由に開閉するために取り付ける金具。2枚の金属板と1本の回転軸からなり、形がチョウに似ている。

### 鐔（つば）

刀剣の柄と刀身の境にとりつけ、柄をにぎる手の防具とする小盤。

### 鉄滓（てっさい）

鉄を取り出した後の残りかす。

### のみ

木材・石材・金属などに穴をあけたり、溝を刻んだりするのに用いる工具。

### 羽口（はぐち）

ふいごから炉に風を送るための管の先端部分につけられているもの。

### 八稜鏡（はちりょうきょう）

八花鏡に類似するが外縁の弧の中心が菱のように光っている鏡をいう。

### 八双金具（はっそうかなく）

門扉・板戸・鎧・調度品などに打ち付ける装飾用の金具。形によって、入り八双・出八双・散らし八双などがある。

### 鳩目銭（はとめせん）

王府時代に用いていた琉球の貨幣。近世琉球の錢貨計算の基本になった。

### 鋤（ひょう）

頭部に笠形のものがついている釘。装飾もかねる。

### 伏鉦（ふせがね）

仏教音楽の体鳴楽器。銅・錫・亜鉛の合金製。鎌倉時代に仏教と伝来。青銅製も多く、当り鉦に三本の短い脚をとりつけた形で、凸面にT字型の枠で打つ。

### 銛（もり）

刺すことによって魚、海獣などをとる漁具。手にもったまま突くものと投げて突きさすものがある。

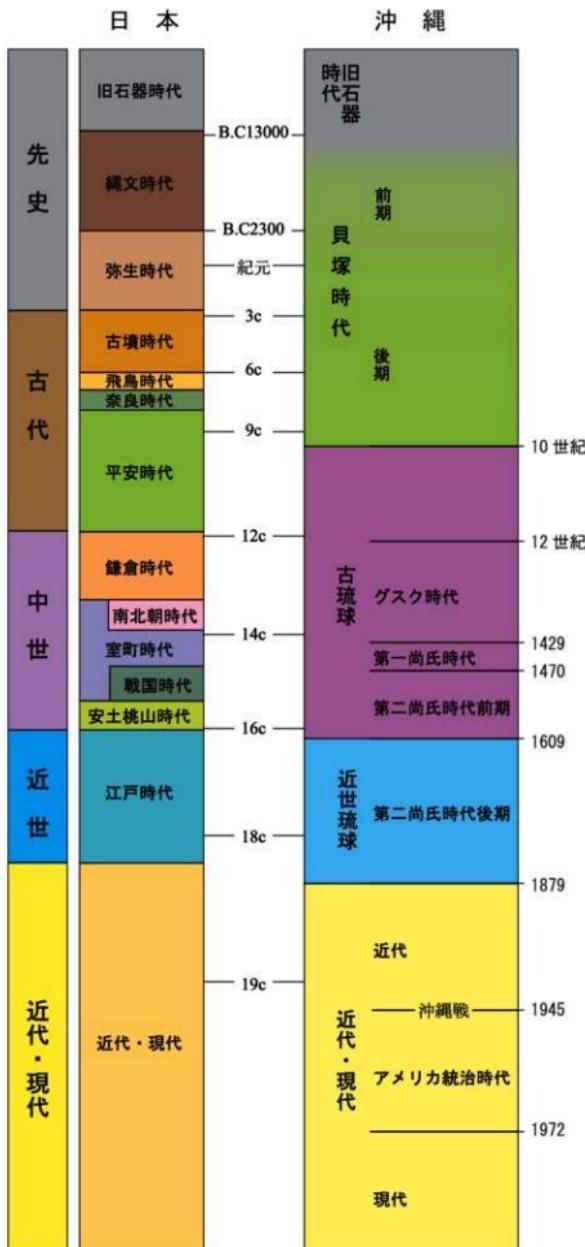
### 湯玉（ゆだま）

鍛込みの段階で、飛び散った溶湯の玉。

### 坩堝（るつぼ）

金属やガラスなどを熔解し、または、灼熱するの用いる。

## 時代区分表



## 【参考文献一覧】

- 1 朝岡康二『日本の鉄器文化 - 鋳治屋の比較民俗学 -』慶友社 1993
- 2 安里嗣淳・大城秀子・花城潤子「南貝塚の調査 9. 骨製品 (2) 刀物痕のある骨片」勝連町教育委員会『勝連城跡—南貝塚および二の丸北地点の発掘調査ー』勝連町教育委員会 1984
- 3 安里嗣淳「沖縄グスク時代の文化と動物」『季刊 考古学』第 11 号 雄山閣 1985
- 4 上江洲均『沖縄の民具』慶友社 1973
- 5 上原静『第 4 章 グスク時代』『沖縄県史 各論編 2 考古』沖縄県教育委員会 2003
- 6 大城慧「沖縄の鉄」『稻と鉄・さまざまな王權の基盤 -』(日本民俗文化大系第 3 卷)株式会社 1983
- 7 大城慧「金属器」沖縄大百科事典刊行事業局『沖縄大百科事典 上巻』沖縄タイムス社 1983
- 8 大城慧「鉄製品」沖縄大百科事典刊行事業局『沖縄大百科事典 中巻』沖縄タイムス社 1983
- 9 大城慧「刀子」沖縄大百科事典刊行事業局『沖縄大百科事典 中巻』沖縄タイムス社 1983
- 10 大塚初重、戸沢充則 編『刀子』『最新日本考古学用語辞典』株式会社 1996
- 11 大塚初重、戸沢充則 編『板状鐵斧』『最新日本考古学用語辞典』株式会社 1996
- 12 大場磐雄 責任編集『神道考古学講座』第 5 卷 祭祀遺跡特説 雄山閣 1982
- 13 沖縄県教育委員会『恩納村熱田貝塚発掘調査ニュース』沖縄県教育委員会 1978
- 14 沖縄県教育庁文化課『船福遺跡発掘調査報告書』(上御頤地区)沖縄県教育委員会 1983
- 15 沖縄県教育庁文化課『カンドウ原遺跡一塙・排水工事に係る緊急発掘調査ー』沖縄県教育委員会 1984
- 16 沖縄県教育庁文化課『西表島 船浦スラ路一港湾施設用地工事等に伴う発掘調査ー』沖縄県教育委員会 1991
- 17 沖縄県教育庁文化課『西表島 上村遺跡一重要遺跡確認調査報告ー』沖縄県教育委員会 1991
- 18 沖縄県教育庁文化課『湧田古窯跡 (I) ー県庁舎行政棟建設に係る発掘調査ー』沖縄県教育委員会 1993
- 19 沖縄県教育庁文化課『平敷屋トウバル遺跡一ホワイトビーチ地区内倉庫建設工事に伴う緊急発掘調査報告書ー』沖縄県教育委員会 1996
- 20 沖縄県教育庁文化課『西表島廬慶廬田城遺跡ー重要遺跡確認調査ー』沖縄県教育委員会 1997
- 21 沖縄県教育庁文化課『首里城跡ー御庭跡・奉神門跡の遺構調査報告ー』沖縄県教育委員会 1998
- 22 沖縄県教育庁文化課『喜友名貝塚・喜友名グスクー宜野湾北中城線 (伊佐 普天間) 道路改築事業に伴う緊急発掘調査報告書ー』沖縄県教育委員会 1999
- 23 沖縄県教育庁文化課『湧田古窯跡 (IV) ー県民広場地下駐車場建設に係る発掘調査ー』沖縄県教育委員会 1999
- 24 沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡ー管理用道路地区発掘調査報告書ー』沖縄県立埋蔵文化財センター 2001
- 25 沖縄県立埋蔵文化財センター『天界寺跡 (I) ー首里社地下駐車場入り口新設工事に伴う緊急発掘調査ー』沖縄県立埋蔵文化財センター 2001
- 26 沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡一下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書ー』沖縄県立埋蔵文化財センター 2001
- 27 沖縄県立埋蔵文化財センター『伊佐前原第一遺跡ー宜野湾北中城線 (伊佐 普天間) 道路改築事業に伴う緊急発掘調査報告書 (III) ー』沖縄県立埋蔵文化財センター 2001
- 28 沖縄県立埋蔵文化財センター『ヤッチのガマ カンジン原古墓群ー県営かんがい排水事業 (カンジン地区) に係る埋蔵文化財調査報告書ー』沖縄県立埋蔵文化財センター 2001
- 29 沖縄県立埋蔵文化財センター『天界寺跡 (II) ー首里城公園管理棟新設工事に伴う緊急発掘調査ー』沖縄県立埋蔵文化財センター 2002
- 30 沖縄県立埋蔵文化財センター『円覚寺跡ー遺構確認調査報告書ー』沖縄県立埋蔵文化財センター 2002
- 31 沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡ー右掖門及び周辺地区発掘調査報告書ー』沖縄県立埋蔵文化財センター 2003
- 32 沖縄県立埋蔵文化財センター『尻並遺跡ー那霸市地方裁判所平良支部建て替えに伴う発掘調査ー』沖縄県立埋蔵文化財センター 2003
- 33 沖縄県立埋蔵文化財センター『御茶屋御殿跡ー遺構確認調査報告書ー』沖縄県立埋蔵文化財センター 2003
- 34 沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡ー城の下地区発掘調査報告書ー』沖縄県立埋蔵文化財センター 2004
- 35 沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡ー城郭南側下地区発掘調査報告書ー』沖縄県立埋蔵文化財センター 2004
- 36 沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡ー東のアザナ地区発掘調査報告書ー』沖縄県立埋蔵文化財センター 2004
- 37 沖縄県立埋蔵文化財センター『与那国島 嘉田地区古墓群ー嘉田地区は場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書ー』沖縄県立埋蔵文化財センター 2004
- 38 沖縄県立埋蔵文化財センター『後兼久原遺跡ー米軍送油管移設に係る緊急発掘調査報告書ー』沖縄県立埋蔵文化財センター 2004

- 39 沖縄県立埋蔵文化財センター『ナカンダカリヤマの古墓群—急傾斜地崩壊危険区域内掩壁工事に伴う発掘調査報告書一』沖縄県立埋蔵文化財センター 2005
- 40 沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡—上の毛及び周辺地区発掘調査報告書一』沖縄県立埋蔵文化財センター 2005
- 41 沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡—書院・鎖之間地区発掘調査報告書一』沖縄県立埋蔵文化財センター 2005
- 42 沖縄県立埋蔵文化財センター『真珠道跡—首里城跡真珠道地区発掘調査報告書（I）一』沖縄県立埋蔵文化財センター 2006
- 43 沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡—御殿門地区発掘調査報告書一』沖縄県立埋蔵文化財センター 2006
- 44 沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡—御内原地区発掘調査報告一』沖縄県立埋蔵文化財センター 2006
- 45 沖縄の土木遺産編集委員会『沖縄の土木遺産～先人の知恵と技術に学ぶ』沖縄建設弘済会 2005
- 46 勝連町教育委員会『勝連城跡—北貝塚、二の郭および三の郭の遺構調査一』勝連町教育委員会 1990
- 47 金子浩昌「勝連城跡出土の脊椎動物遺体」勝連町教育委員会『勝連城跡—南貝塚および二の丸北地点の発掘調査一』勝連町教育委員会 1984
- 48 岸本義彦「自然遺物 ア、獣骨」佐敷村教育委員会『—佐敷グスク発掘調査報告書—佐敷グスク』佐敷村教育委員会 1980
- 49 木村重信「フランコ・カントブリア美術」『世界考古学事典 上』 平凡社 1985
- 50 金武正紀「鉄斧」具志川市教育委員会『宇堅貝塚群・アカジャンガー貝塚発掘調査報告』具志川市教育委員会 1980
- 51 久保智康「琉球の飾金具」『日本の美術』No.437 至文堂 2002
- 52 国立歴史民俗博物館編『新弥生紀行—北の森から南の海へ』朝日新聞社 1999
- 53 佐敷村教育委員会『佐敷グスク—佐敷グスク発掘調査報告書一』佐敷村教育委員会 1980
- 54 新里貴之「先島諸島におけるグスク時代煮沸土器の展開とその背景」『グスク文化を考える—世界遺産国際シンポジウム＜東アジアの城郭遺跡を比較して＞の記録』今帰仁村教育委員会 2004
- 55 嵩元政秀、安里嗣淳『日本の古代遺跡 47 沖縄』鶴保育社 1993
- 56 知念勇「沖縄諸島の搬入品」『考古大綱 第12巻 貝塚後期文化』小学館 2004
- 57 知念村教育委員会『畜場御嶽と自然—世界遺産普及図書一』知念村教育委員会 2003
- 58 中座久雄『圓比屋武御嶽石門復元工事報告』沖縄県教育庁文化課 監修『沖縄文化財調査報告』1958年 那覇出版社 1978
- 59 新田重清『第3章 弥生～平安並行時代』『沖縄県史 各論編2 考古』沖縄県教育委員会 2003
- 60 真栄平 房昭「琉球の円覚寺跡から出土した短剣 東南アジア交流史の周辺（宗教性おびた宝剣 ジャワから琉球に伝わる）」沖縄タイムス 2002年2月7日 朝刊
- 61 八幡一郎・大場馨雄・内藤政恒 監修『新版考古学講座 第8巻 特論（上）』祭祀・信仰 雄山閣 1979
- 62 山本正昭「琉球史における「武」の諸相」沖縄タイムス 2001年8月28日～9月4日

許可なく本書の複製および転載、複写を禁ずる。

平成 18 年度企画展  
「土からあらわれた金属製品」

2006（平成 18）年 10 月 24 日

編集・発行 沖縄県立埋蔵文化財センター  
住所 沖縄県中頭郡西原町上原 193-7  
電話 098-835-8752 FAX 098-835-8754  
<http://www.maizou-okinawa.gr.jp/>

この図録は、500 部製作し、  
1 部あたりの経費は 336 円です。